

第3回徳島県公立高等学校の在り方検討会議 会議録

I 日時 令和7年12月25日（木）午前10時から正午まで

II 場所 県庁10階大会議室

III 出席者 委員16名中15名出席（欠席1名）

（委員）

佐古秀一会長、金西計英副会長、赤松梨江子委員、岩本悠委員、植田滋委員、
蔭西義輝委員、木屋村浩章委員、鈴鹿剛委員、住村早紀委員、滝川尚委員、
田村康治委員、服部あい委員、正木美智子委員、松本賢治委員、米田若菜委員

（県）

教育次長、教育創生課長ほか

IV 次第

1. 開会

2. 委員紹介

3. 議題

（1）拠点校のイメージについて

（2）学区撤廃に向けた対応

（3）国の動向について

4. 閉会

<配布資料>

資料1 第2回徳島県公立高等学校の在り方検討会議の概要

資料2 公立高等学校の在り方に関するアンケート結果②

資料3 公立高校のあり方に関するタウンミーティングでの主な意見②

資料4 拠点校のイメージについて

資料5 高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン(仮称)）骨子等

V 会議録

(開会)

<佐古会長>

皆様おはようございます。歳末も押し迫りまして、お忙しいことと思いますが、第3回の検討会議にご出席いただきましてありがとうございます。本日も皆様方から率直なご意見をお聞きしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは本日の議題に入ります。まず議題の1番目、「拠点校のイメージについて」、事務局から説明をお願いします。

(議事)

事務局より、「資料1～3」「参考資料1・2」「資料4」「参考資料3」を説明

<佐古会長>

ありがとうございました。前回の会議で委員の方々からは、これから生徒数が大幅に減ること、その中で徳島県においては学区を撤廃していくという方向を定めましたので、県内のどこに住んでいても無理なく通える範囲で、生徒に行きたい学校がある、あるいは生徒の可能性を大きく伸ばすことができる学校を作ることが課題ではないか、そのために拠点校というものを整備しましょう、という点では見解は一致していたと思います。

その中で、具体的に拠点校としてどのような学校を想定するかについては意見が分かれておりましたので、今回もう一度この拠点校のイメージについて委員の方々からご意見を承り、固めていきたいと思っております。資料4あるいは参考資料3などもご覧いただきながら、それぞれの委員の立場から徳島県に整備すべき拠点校についてご意見があればお聞かせください。

<蔭西委員>

拠点校のイメージを具体的に示していただきありがとうございます。

一つ気になった点ですが、裏面の(3)「各地域における配置」の③のところに「オンライン活用等における教育内容の充実」という記載があります。これだと③だけに限定されるイメージになってしまいますが、現実には、特に難関大学に進学している方はオンラインで塾の授業を受けていることが周知の事実だと思います。

おそらくオンラインで教育を受けることには慣れてきているので、①も②も含めて、オンラインをどう活用していくか、効率性の面も含めて検討された方が良いのではないのでしょうか。

例えば理科の授業なら、実験はリアルで行い、理論を学ぶのはオンラインで良いのではないのか、といったことも含めて検討してはどうでしょうか。

<佐古会長>

ありがとうございます。拠点校のタイプに関わらず、また拠点校以外も含め、高等学校教育

全体でオンラインの活用を検討すべきというご意見ですね。貴重なご意見ありがとうございます。他はいかがでしょうか。

<植田委員>

議事録に私の発言を記載していただき感謝しております。

拠点校のイメージのところで、皆さんと認識を一致させなければならないのは、「通える範囲なのかどうか」という点です。通える範囲ということが優先されると、地域が限定されてしまいます。

例えば、寮を作っても「一番校」を作りましょうという議論があります。例えば、城南高校に寮を併設して、県内のみならず県外からも来るような生徒を集めるぐらいの気概を持って一番校を作るのかどうか、そこを決めなければいけないのではないのでしょうか。

特色のある高校を作るというのは総論としては合意があると思いますが、どこまで本気でやるかというところが曖昧ではないかと感じています。

例えば海部高校の事例ですが、野球部などを見ると県外出身の選手が多いですね。あれは海部高校に魅力があるから、わざわざ県外から来ているのだと思います。徳島県内で特色ある学校を作るとしたら、地域をまたいででも来るような高校を目指し、なおかつそれを受け入れる体制、例えば寮を含めた環境を整えることまでして特色ある学校を作るのかどうか、という点です。

<佐古会長>

海部高校の事例が出ました。県外の生徒が海部高校に集まってくる要因について、木屋村委員から情報提供をお願いします。

<木屋村委員>

県外の生徒にとって海部高校の最大の魅力は部活動です。また、公立高校の中に3つの学科（普通科、情報ビジネス科、数理科学科）があり選べることです。そして小規模すぎず一定の規模があることが部活動をする上でも大事な要素となっており、そういった点で選ばれていると思います。さらに、地元の海陽町の支援も受けられるという点も大きいです。

都会にいたら埋もれてしまうけれど、海部高校に行けば輝ける、そういった学校を探している全国の中学生のニーズに合っているのだと思います。

<佐古会長>

植田委員の問題提起は、我々は主に徳島県内のことを考え、「県内どこの地域に住んでいても」という話をしてきましたが、通学範囲を超えて、人が集まるような学校を今回考えるのかというお話です。この点についてご意見はありますか。

<木屋村委員>

続けてよろしいでしょうか。先ほどの蔭西委員や植田委員のお話に関連して、私が現在務めております城東高校の現状をお伝えします。

ご存知の通り、城東高校は令和3年度から学区制限なく県内全域から募集できる学校になっております。学校説明会などには、県西部の三好市や県南部の海陽町からも見学や体験に来ています。最終的に住む場所の問題は大きいですが、入学する場合は寮に入ったり、下宿したり、保護者と共に転居して生活している状況があります。

徳島市から見た「学区外」の生徒が令和3年度から年々増えています。子育て世代の保護者や中学生の傾向として、やはり「自分たちが行きたい学校に行く」というニーズが増えていると感じています。

また、オンライン学習の話もありましたが、現在、高校では「反転授業」のような取組が少しずつ進んでいます。知識的な説明は家庭で動画を見て予習し、学校で集まった時には意見を述べ合う活動を行うものです。これは大学受験に向けて授業時間が足りないため、効率よく学習させる必要性から進んでいる取組です。

<佐古会長>

ありがとうございました。では赤松委員、お願いします。

<赤松委員>

基本的な部分を確認させていただきたいのですが、この資料のイメージ図を見ると、エリアの中での「エリア拠点」と、高校の特色や専門性をテーマにした「テーマ拠点」、大きく2つの考え方があるという理解でよろしいでしょうか。

また、組織的な話として、資料裏面の図の①「単独のキャンパス」には校長先生が1人いますが、②の「複数のキャンパスを一体的に運営」する場合も校長は1人、③の「連携型」の場合は拠点校と高校Aそれぞれに校長がいる、という組織形態の理解でよろしいでしょうか。

<事務局>

はい、ご質問の通りです。イメージとしては、①、②については、校長先生はお一人、③についてはそれぞれ、という形を想定しております。

<赤松委員>

ありがとうございます。もう一点確認ですが、県内の全ての学校がこの「拠点校方式」のどこかに割り振られるわけではなく、必要に応じて拠点校方式を作っていく、という理解でよろしいでしょうか。

<事務局>

はい、その通りです。

<佐古会長>

他にご意見はございますか。

<住村委員>

住村です。専門的なことは分からないので、保護者の立場からお伝えします。

今ちょうど子どもが中学3年生で高校を選んでいる時期なのですが、子どもの意見、先生の意見、保護者の意見がバラバラだと感じています。各高校の特色を知る主な機会であるオープンキャンパスといっても、日程が重なっていて全部には行けず、結局は「点数が何点だからこの学校」「ここはチャレンジ校」といった選び方になってしまいます。

三者面談でも、子どもが何をしたいのかが決まらないまま、親も「じゃあ普通科に行ったら」としか言えない現状があります。

参考資料2に記載されている詳細な情報については、調べ方も分からず、中学生や保護者には伝わっていません。小学校・中学校の段階からキャリア教育を行っていただいているのですが、現状では高校選びの基準を持てておらず、先生、子ども、保護者全員が共通認識を持てるようになっていくとよいと考えています。

先日、中学校で開催された保護者対象の進路説明会においては、手続きの話が中心でした。保護者は子どもがどういうことをしたいのかという視点で高校を勧めたいので、各学校の特色を理解する機会が必要であると思います。第1回会議で意見として出された「高校合同説明会」のようなものを開催するなどしないと、リアルな情報が伝わっていないと感じます。

拠点校も含めて、どこにどういう学校があり、どういう魅力があるのかを、もっと早い段階から子どもたちや保護者、教員に落とし込んでいかないと、選びたくても選べない状況が起きると思います。

<佐古会長>

進路選択の上での各校の特色や強みに関する情報提供が、親や子どもに届いていないということですね。

<赤松委員>

私もその件に関して問題提起をさせていただこうと思っていました。

住村委員のお話では、徳島市内においては高校説明会があまり行われていないようですが、郡部（西部など）では、中学校が各高校に依頼して一斉に説明会を行ったり、あるエリアでは中学校合同で高校を招いて説明会を行ったりしています。

ただ、これらは中学校主導で行われており、高校側から「説明に行きたい」と言っても、時間的な制限などで断られることもあると聞きました。

県全体で、どこにどのような特色のある高校があるのかを中学生や保護者に伝えていくことは重要です。私立学校は熱心に学校訪問をしています。公立高校も含め、どういう形でやっていくとよいのかを考える必要があります。

また、点数で高校を決めてしまう進路指導になっていないかとの点については、特に県西部など定員割れしている地域では「勉強しなくてもどこかには入れる」という状況があり、中学校の先生が指導に苦勞しているという話も聞きます。キャリア教育や生き方に関する学びについて、小中学校段階からしっかりと取り組んでいかなければ短絡的な高校選びとなってしまいますので、小中学校と高校がより一層連携していく必要があると思います。

<田村委員>

キャリア教育の重要性を強く感じています。小学校教育も今、大きな改革の段階にあり、タブレット導入で授業が大きく変わっています。教科学習以外にも国際、人権、道徳などの教育が増える中で、タブレットを活用した地域課題を解決する活動などを通じて、「自律して学ぶ」未来の子どもの育成を進めています。これがキャリア教育の中で必要であると考えて日々取り組んでおります。

<米田委員>

拠点校については、複数の学校とセットで考えるのが良いのではないかと考えています。

子どもたちが「どういう学び方で何を学ぶのか」を前提に考えるべきです。大人数で創発が起きる中で学びたい子もいれば、少人数でじっくり対話を通して学びたい子もいます。

拠点校がある一定の人数規模を担保するのであれば、連携する高校は小規模校になるかもしれませんが、拠点校と連携して発表会や部活動などを一緒に行うことで、それぞれの学び方の利点を活かせると思います。

選択肢として、普段は多様な人と学びたい子は大きい学校へ、じっくり学びたい子は小規模校へ、といった選び方ができると良いです。

また、先ほどの進路説明会についてですが、城西高校神山校の場合、本校とセットで説明時間が決められており、分校がアピールする時間が現実的に与えられていなかったりします。

加えて、神山校のように県外から生徒が来ると、県内の生徒が「県外から来るほど魅力があるのか」と見直すきっかけになり、評価軸が学力一本ではなくなるという効果があると感じています。

<滝川委員>

補足しますが、徳島市内の中学校においても各校で進路・高校説明会を行っています。手続きの説明だけでなく、いくつかの高校の先生に来ていただいて説明をしていただく時間を取っています。ただ、全ての高校に来ていただくのは時間の制約上難しいため、進路希望調査などを参考に選定しています。

<服部委員>

高校選びについてですが、今の子どもたちは動画や画像で情報を得ることに長けています。高校の特徴や身につく力などを一覧できるような資料や動画を作成し、子どもたちがそれらを

活用して、より自発的に高校を選べるようになれば良いと思います。

JICAにおいて出前講座を行っています。最近は協力隊の体験談だけでなく、キャリア教育のニーズが高まっています。先日、神山の中学校でラオスに派遣された先生が授業を行い、子どもたちが「自分だったらどう国際協力をするか」を考えて発表する姿を見て、キャリア教育につながると感じました。

<佐古会長>

様々なご意見をいただきましたが、論点を整理いたします。本県の高校配置については、現状維持はできないと考えられます。特に小規模化が進む「県西部」において、どのような拠点校をつくるべきか、ご意見を伺いたいと思います。その後、テーマ型といいますか、県内でこのような高校をつくるべきというご意見を別途伺えればと思います。

<蔭西委員>

県西部といっても美馬市、三好市などかなり広いですし、地域間で意見も分かれると思いますが、ある企業経営者と話した際、「産業系の高校は絶対必要である」「脇町と池田をくっつけたらどうか」といった意見を伺いました。つまり、保護者の方や地域の方など、聞く相手によって答えは全く異なるという意味です。非常にナーバスな問題であり、答えを持ち合わせているわけではありませんが、議論が拡散するのではないかと思います。

<佐古会長>

おっしゃる通りナーバスな問題です。当会議において学校名を出して議論することはできませんが、我々が考えなければならないのは、県西部にはこんな学校ができればいいのではないかとしたことだと思います。委員の皆様には、特定の利害関係者の代表というのではなく、有識者としてのお考えをお聞きしたいと思います。

<蔭西委員>

後ほど Next High School の話が出てくるかと思いますが、その観点から言えば、普通科系の高校と専門学科系の高校がひとつずつあればいいということになります。場所はどこがいいのかは分かりませんが。

<佐古会長>

補足しますと、理系中心の学術研究や産業人材の育成を進めることにシフトする方向で、議題（３）の資料が文部科学省からも出されております。そうすると、今後を検討するにあたっては、普通科の学校がこれからも普通科のまま残るということを前提とするかどうかも含めての議論が必要かと思います。

<蔭西委員>

例えば、徳島科学技術高校のような学校を目指すというのも一つの案であると考えます。

<佐古学長>

普通科の高校が多いから普通科前提とする話ではなく、皆さんのご意見を伺いたいと思います。

<赤松委員>

確かにより具体的な話をしていかななくてはならないと思います。いろいろなアイデアを出して、その中から結論を導いていけたらいいと考えます。

三好地区の話ですが、定員割れで存続の危機にあります。社会情勢としてAIの進展や理系へのシフト、ホワイトカラーからブルーカラーへの動きなどがある中で、例えば三好・池田エリアでは産業系の学びができる特色が必要です。個人的なアイデアですが、池田高校には現在、本校、辻校、三好校の3つのキャンパスがありますが、校長1人で3キャンパスと定時制を運営するのは困難です。キャンパスを縮小していくことも必要ではないかと思います。例えば、辻校は駅直結で通いやすく環境も良いので、「学びの多様化学校」の西部の拠点にするのも一つの案です。

三好市におけるタウンミーティングの参加者の中に、県央部から池田高校に通う生徒がいました。その生徒に池田高校を選んだ理由を聞くと、「県内に一つしかない探究科で学びたい」と言っており、希望を感じました。

<松本委員>

進路選択において、「自分が行きたいからその学校を受けられる」というのは理想で、現実には学力が伴わなければ難しいものです。その理想と現実を埋めるのが教育の営みであり、中学校では子どもたちの特性と学力をもとに進路指導をしっかりと行っております。それがより厳しくなってくるのではないかと予想されます。最終的には、やはり学力がついていなければ不可能であり、現実と理想を生徒も保護者も理解した上で、学校生活を送ってほしいと思います。

拠点校のイメージについては、県外事例や資料を見ても、人口減少や校舎の老朽化などの視点によりメリット・デメリットがあり、どれが良いか判断するにはもう少し時間がかかると感じています。

<鈴鹿委員>

拠点校の設置は、各地域が存続していくために必要な措置だと思います。同時に、高校Aのような拠点校ではない小規模校にもきらりと光る特徴を持たせて配置することが重要です。

理系教育へのシフトという話がありましたが、海外では理系人材の給与水準が高いのに対し、日本では低い状況があります。日本の場合、工場系と経営者系というキャリアの流れがあり、近年は技術畑から社長に就任する例も増えてきましたが、これまでは文系出身者が経営の中心を担ってきたと言えます。こうした状況を踏まえると、日本でも小学校段階からSTEAM教育を

充実させ、子どもたちの興味・関心を科学技術や創造的な学びへと広げていくことが今後の教育の在り方を考える上で重要です。すでに小中学校ではそのような学びが広がりつつあり、その流れを受け止める高校教育の在り方を検討する必要があります。また、文系人材の育成という観点では、商業系などの高校は受け皿として機能し得ます。理系・文系双方の学びのバランスを取りながら、高校段階で一体的な教育体系を構築していくことが求められると考えています。

<正木委員>

委員の皆さんのご意見を伺う中で、徳島県として独自の拠点校イメージを構築するのか、それとも参考資料に示された県外事例のような分類を踏まえて整理していくのかが気になりました。県外事例の分類は分かりやすく、方向性を検討する上で参考になると思います。

<佐古会長>

時間が押しておりますので、議題2は次回以降に回し、議題3「国の動向について」に移らせていただきます。事務局から説明をお願いします。

(議事)

事務局より「資料5」「参考資料5～7」を説明

<佐古学長>

ありがとうございました。議題1では県西部を想定したご意見を求めましたが、議題3については、地域を限定せずテーマ別ということで、徳島県にはこのような高校が必要であるのご意見を伺いたいと思います。特に、総合教育会議にご出席いただいた植田委員、蔭西委員、必要でしたら補足説明などをお願いします。

<植田委員>

資料に記載のとおりですが、論点の一つ、「学力を上げてください」ということです。国が言っているAIやDXといった流行り言葉を高校教育で意識させすぎて良いのか疑問です。産業競争力を上げるために最も必要なのは、地道な基礎学力の向上です。

その観点から徳島県公立高校の学力は他県に比べてどうなのかという問題提起をしています。尺度がない中でひとつの現象として見えるのが徳島大学工学部への県内出身者の合格者が、以前の4割から現在は2割程度に減っています。これは単純に受からなくなっている、他県の生徒に押し負けているということのようです。そうした結果を見ると、本県の学力が他県に比べて落ちているのではないかと懸念しています。

国の方針に理系人材やAIに代替されない能力の育成などとありますが、高校生としてやるべきことは、学力をつけるために勉強することです。考える癖をつけること、課題発見能力などを養うことであり、それらは基礎学力がベースになります。高校教育のなかで学ぶことを基礎にして、将来、専門的な進路に進む必要があると思います。

< 蔭西委員 >

総合教育会議においては、昨年実施したキャリア教育の調査で高校2年生の半数以上が将来徳島や四国に住みたいと回答しており、より一層、地域を愛する教育を進めていく必要があるとの意見を述べました。

Next High Schoolの話ですが、国の方針は理系教育と実業教育を増やすことに舵を切ったと感じます。県としてどのように対応しようとしているのか、伺いたいと思います。早く絵を描いて動かないと、全国での取り合いになります。特に数学・理科の教員確保は課題になるのではないのでしょうか。

また、高校だけでなく大学にどう動いてもらうのかということも必要です。大学入試の面での課題が大きく、たとえば企業経営者からは「徳島大学理工学部に関人枠が必要」という意見を聴くことがかなり多いです。

< 事務局 >

国から詳細なスケジュールや内容について示されていない状況ではありますが、委員がおっしゃる通り非常に重要な内容ですので、県としても遅れることなく対応できるよう検討しております。

< 金西委員 >

アドミッション担当の先生からは、県内の生徒に一人でも多く来てもらえるよう様々な取組をしていると聞いております。

先ほどご意見いただいた件に関しては、過去20年、30年を見ると、関西の私立大学などで理学部、工学部が次々と設置され、国立大学では和歌山大学や香川大学に工学系の学部が設置されています。県内高校生の進学動向をしっかりと分析できているわけではないですが、30年ぐらい前に比べると徳島大学が合格しやすくなっているにもかかわらず、県内の生徒は関西や東京へ行きたがっているという状況があります。逆に兵庫県などから学生を集めようと努力している状況です。

< 蔭西委員 >

そうだとすると、徳島の高校生の学力が平均的にかなり低下しているということになりませんか。

< 金西委員 >

我々のイメージとしては、優秀な生徒が関西や東京へ流出しており、以前なら徳島大学に来ていた層が現在に残っていないと考えています。優秀な生徒の数は変わっていないと思います。

< 植田委員 >

東京大学の合格者数は、徳島県が全国最下位ではないでしょうか。

< 蔭西委員 >

県内からの難関大学合格者数については、はっきり言うと減少しています。

< 佐古会長 >

植田委員と蔭西委員がおっしゃりたいのは、徳島県内の生徒が大学進学において苦戦しているとの認識から、高校における基礎学力の形成に問題があるのではないかとということでしょうか。

< 蔭西委員 >

付け加えますと、数年前、子どもの担任の先生に「STEM 教育が重要であり、理数教育に力を入れる必要がある」と伝えたところ、「現在は普通科においては文系の方が人気」と答えられました。正直なところ、世の中の動きとは逆行していると感じました。理数教育をしっかりとやりたいというのであれば、かなり力を入れる必要があるし、高校だけでは難しく、小中学校から取り組む必要があると考えています。国は文系と理系を 1 : 2 にしたいと思っているのですが、本当にやっていけるのかなと重い課題を背負わされたと感じています。

< 金西委員 >

補足ですが、徳島大学の工学部などの偏差値は上がっておらず、むしろ下がっている傾向があります。また、ここ 5 年ぐらいで徳島大学全学部における県内からの進学者数は減ってはいない状況です。

< 佐古会長 >

先ほどの高校の学力の問題については、今後の高校教育の在り方を考えていく上で共通のテーマとなるかもしれません。木屋村委員、いかがでしょうか。

< 木屋村委員 >

城東高校の現状ですが、学年 7 クラス中、理系が 4 ～ 5 クラスあり、こちらが思っている以上に生徒や保護者は世間の動向を感じ取って理系を希望している印象です。

拠点校の話に戻りますが、私も県西部が最も深刻であると思っています。拠点校の中身は後にして、生徒たちが拠点校を選べるということを考えると、通学可能な範囲に設置または通学困難な生徒のために「寮」の整備は大賛成です。

また、普通科と専門学科を単純に合体させるのは、カリキュラム編成上、難しいとの実感があるので、それについては時間をかけて議論すればよいと思います。まずは、どういう位置に置けばよいのかを決定すべきであると感じました。

<滝川委員>

国の基本方針に基づく資金については、学区撤廃への対応、教育環境の公平性の担保との観点から、小規模化・老朽化が進む県西部の教育環境整備に活用できるとよいと思います。特に、類型「多様な学習ニーズに対応した教育機会の確保」については、地域における拠点校の設置の趣旨と方向性が一致していると考えられます。

<田村委員>

コロナ禍で「エッセンシャルワーカー」の重要性が認識され、将来的に不足することが予測されています。今回の国の支援を活用し、普通科系の高校と併せ、地域産業を支える人材育成の要である専門高校の魅力化も進めていかなければならないと思います。

<松本委員>

基礎学力の向上については、教育委員会として一丁目一番地の課題です。これをどのように学校へ伝え、レベルアップを図っていくのかは大きな課題であると思います。小・中の義務教育と高校教育のもとで深く考える力や課題発見能力、コミュニケーション力などが付いていくとよいと考えています。

また、小中学校からの理数教育については、学力学習状況調査において、3年に1回、理科を実施していることから重要であると考えています。

国の高校教育改革に関する基本方針に関しては、先日、文部科学省の説明を聞く中で、理系人材の不足について理解することができました。是非、資料に記載されている理数系人材の育成については、強く推進してほしいと思います。

<鈴木委員>

海外ではSTEAMと並んでTVET (Technical and Vocational Education and Training) が叫ばれており、OECD や UNESCO など推進されているそうです。基礎学力の向上は当然やるべきことでありますが、一方で子どもたちが頑張れといわれるだけでどれだけ頑張れるのかという問題があります。我々の世代までの人は、「出世したい」「いい大学に入りたい」といった欲求だけで頑張れたように思いますが、最近の生徒を見ると「今日頑張らないといけない」との意識がそれほど高くない状態にあると感じます。高校の教員を務めていたときにカンボジアの生徒との交流の中で、「学ぶことで明日の自分が変わる」という意識で頑張る姿を見て、その子たちに教える日本の生徒たちも頑張れました。その興味関心の部分に着目し、意欲を持たせることが大切だと思います。

上位層だけでなく、教室で座ってられないような子も含め、誰一人切り捨てず、みんなが輝ける学びの場をどう作るのかを議論すべきであると感じています。

<岩本委員>

オンラインから3点申し上げます。

1 点目、今回の資料で示された「拠点校」と、国が基金で進める「パイロット校」は似て非なるものです。国のパイロット校は改革を先導して横展開するのが目的です。イメージ図を見ると、拠点校以外の高校も含め全体として取り組むべき内容など様々な目的が混在しているので、何の課題解決のための手段としての拠点校なのか、狙いをシャープにする必要があると思いました。

2 点目、全国募集については、学校規模や特色の有無にかかわらず、生徒を集めている高校が存在します。そうした高校に共通して必要となるのは、寮などの受入れ環境に加え、ハウスマスターやコーディネーターといった人的基盤です。これらが整っていなければ、全国から生徒を受け入れる仕組みは安定的に機能しません。県や学校のリソースだけでは限界があり、市町村の参画と連携が不可欠です。

3 点目、国の動きとしては、おそらく来月末あたりにはグランドデザインが発表され、その後、各都道府県において実行計画を作成することになるかと思います。その際に県教委が形式的に文書をまとめるだけでは、改革はなかなか実効性を伴わないとの話も出ています。現在、全国キャラバンとして、文科省とも連携しながら各都道府県を訪問し、教育委員会関係者、産業界、大学などに対して趣旨説明や認識の共有を進めるとともに、一緒に実行計画をつくっていくための機運醸成を図るといった取組を 2 月から 6 月にかけて進めていく予定です。また、事務局の方へも適宜情報共有し、この場での議論とも整合を図りながら進めていくことができればよいと考えています。

<佐古会長>

ありがとうございました。時間となりましたので、議題 2 については次回以降に取り扱わせていただきます。本日は国の方向性についても議論しましたが、当会議は国の方針に沿って高校をどのようにしていくかを検討する場ではなく、各方面の有識者の皆さまにお力添えをいただきながら、徳島県の高校生の教育環境を整え、一人一人の力を伸ばす教育を実現するために何が必要かを議論する場です。今後もその視点を大切にしながら、引き続きご議論をお願いしたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

(閉会)